

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03044

研究課題名(和文) 我が国における「船だんじり文化」の形成と展開に関する研究 - 西日本を中心として

研究課題名(英文) Research on the Formation and Development of Funa-danjiri in Japan : Focusing on the Cases in Western Japan

研究代表者

高橋 晋一 (TAKAHASHI, Shinichi)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・教授

研究者番号：10236284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通して、全国に500あまりの船だんじりが出る祭りの存在を確認できた。海、川(生業や交易)との結びつきが強いが、長野県安曇野地方の「お船」のように水と関わりを持たないものも見られる。船だんじりの形態は大きく御座船型、廻船型、鯨船型、その他に分類でき、藩主の海路による参勤交代、廻船による交易、捕鯨の拠点に関連しているものが多い。歴史的には京都祇園祭の船鉾などを除きほとんどが近世以降に始められたもので、主に江戸時代に、御座船や廻船といった当時の権力を象徴する豪壮な船が、地域の文化・経済・政治的アイデンティティの象徴として取り入れられ、各地に船だんじりの文化が開花したと考えられる。

研究成果の概要(英文)： Through this research, I confirm the presence of over 500 "Funa-danjiri" (ship-shaped floats) all over Japan. Many of them are strongly related to the livelihood or commerce through ocean or river. But there are few cases not related to the water like "Ohune" in Azumino, Nagano Prefecture. The form of "Funa-danjiri" can be roughly divided into three types: "Gozafunne" (Shogun's ship in the Edo period), "Kaisen" (cargo vessel), "Kujirabune" (whaling ship), and the other. Most ships were made after the Edo Period as the symbol of regional cultural, economic and political identity. We can regard "Funa-danjiri" as a spectacular ship symbolizing political and economic power at that time.

I found many various types of ships in the festivals through this research. It'll be necessary to study ships in the festivals with a wider viewpoint.

研究分野：民俗学

キーワード：船だんじり 祭り 山車 権力 海の文化 川の文化

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで徳島県を中心として各地の祭礼山車の調査研究を進めてきたが、その中で船をかたどっただんじり（船だんじり、お船、御座船などと呼ばれる）が西日本を中心とした各地に点々と分布し、「船」という象徴を核とした特色ある祭りを作り上げていることを知った。にもかかわらず、各地の船だんじりやその祭りについては、当該地域の民俗調査報告書や市町村史の中でごく簡単にその存在について触れている程度で、その地域の歴史・社会・政治・経済・文化的文脈をふまえた個別の事例検討—そもそもなぜその地域で船だんじりが出るのか、なぜ船だんじりや祭りがそのようなかたちを取るのか—も不十分であり、ましてや、各地の船だんじりや祭りについて「比較」という観点から地域横断的に検討を行った研究は皆無である。日本における祭礼山車の歴史や展開過程を「都市祭礼」という狭い枠を一度取り払ってダイナミックに検討する上で、また地域社会における「祭りと象徴」の関係を考察する上で、船だんじりを主題として取り上げることには学術的意義があると考えた。

各地の事例を丹念に当該地域の文脈に位置づけて理解しつつ、それらを比較検討する中から、各地域における船だんじり・船の祭りの位置づけ、さらには日本の地域社会における船だんじり・船の祭りの位置づけの全体像が見えてくる。またこうした比較検討の作業を通して、我が国における船だんじりとその祭りの形成・展開過程についても明らかにすると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文献研究と現地調査を通して、船だんじり（船の形をした山車）とその祭りの地域的展開の諸相、および我が国における船だんじりとその祭りの形成・展開過程を明らかにすることにある。船だんじりとその祭りについてはこれまで研究の主題として取り上げられることがほとんどなかったが、その検討は地域社会における祭りと象徴（さらにはその背後にある権力）の関係を考える上で、また我が国の祭礼文化史を解明する上で、さらには山車を通して我が国の地域交流史の一端を理解する上で大きな意義を持っている。

3. 研究の方法

本研究の目的は、船だんじりとその祭りの地域的展開の諸相、および我が国における船だんじりとその祭りの形成・展開過程を明らかにすることにある。この研究目的を達成するために、各地の船だんじりとその祭りに関する文献資料を網羅的に収集、データベース化の作業を進めるとともに、西日本（近畿、東海、中国・四国地方）を中心とした各地の船だんじりとその祭りに関する現地調査（観察調査、聞き取り調査）を実施する。文献研

究・現地調査で得られたデータを総合し、各地の船だんじりとその祭りの比較分析を行う。分析を進めるに当たり、とくに船だんじりの分布、名称、形態、歴史、関連する民俗芸能等に留意する。

4. 研究成果

(1)はじめに

以下、船だんじりの分布、名称、歴史、形態、関連する民俗芸能等について、調査研究の結果を整理する。なお、現地調査は西日本を中心に行ったが、文献調査については東日本も含め全国の船だんじりを網羅的にすくいあげる形で作業を行った。その結果、全国の船だんじりの概況を全体的に把握することができた。

(2)分布と船だんじりの地域性

本研究を通じて現時点までに確認できた（狭い意味での）船だんじりが出る祭りの数は、北海道 15、東北 24、関東 34、中部 244、近畿 44、中国 39、四国 72、九州 16、合計 488 であった。地域によりかなり片寄りがあり、その中でも特定の都道府県（地域）に集中する傾向が見られた。全国的に見ると、東日本よりも西日本（九州を除く）に分布が密になっている。

東北地方では青森県に 20 例と全体の約 8 割が集中しており（「船山」と呼ばれる）、東北他県の事例はわずかに 1 例ずつである。青森県の船山には北前船（廻船）文化の影響が強くみられる。「船山」の文化は海を越えて北海道（道南地方）にも伝播し展開している。

関東地方では千葉県沿岸部（館山市、勝浦市、南房総市等）「お船」と呼ばれる）に約 6 割（計 20 例）の船だんじりが集中して分布する。東京都の船だんじりは、古いものは日枝神社の天下祭（山王祭）ぐらいしか存在しない。六所神社（神奈川県大磯町）では船型の舞台が設けられ「鷺の舞」が舞われる。茨城県には船だんじりは 2 例しか見られないが、北茨城市・佐波波地祇神社の「大津のお船祭り」は関東地方でもひととき大きな船の祭りである。

船だんじりの数は中部地方に圧倒的に多いが、これは長野県（安曇野地方等）に「お船」（舞台、屋台、宝船、山車などと呼ぶところもある）と呼ばれる華麗な人形を飾った船型の大型山車が顕著に見られることによる（180 ヶ所あまりで曳き出される）。長野県の「お船」は、海や川と関係しない内陸地の船だんじりという点で特異な存在である。これは、安曇野に住む人々の祖先である安曇族が、海から内陸までを船で自在に行き来していた海人族であったという伝承に基づくものとされる。

人形を飾る舞台としての「お船」がさらに巨大化したと考えられるのが、石川県能登地方に見られる「でか山」である。富山県魚津市のたてもん祭りの「たてもん」は一見する

と提灯を積み重ねたタイプの山車に見えるが、ソリ型の土台は船体を、三角形にアレンジされた提灯は船の帆を象徴しているとされ、船だんじりの変形とみることができる。新潟県上越市の直江津祭りでは17台の船だんじりが曳かれるが、これは我が国最多の台数である。

愛知県から岐阜県にかけて、津島天王祭（愛知県津島市）の「巻藁船」を模した山車（船）が広く分布している。天王祭と同様、川渡御を行っている事例が多いが、船型に載せて陸を進む事例などもみられる。

近畿地方では、京都の船鉾を除くと、船だんじりの多くは御座船型である。住吉神社の住吉祭（大阪市）では、船だんじりと同型の「船神輿」が出る。鳥出神社（四日市市）など三重県のいくつかの祭りには当地の捕鯨文化を背景とした「鯨船」が出て、捕鯨の所作を模しながら巡行する。ただし鯨船の外観は御座船型である。相賀八幡神社（橋本市）など和歌山県のいくつかの祭りでは、船だんじりを曳くとともに担ぐ。

中国地方の船だんじりは海岸地方に多く分布し、瀬戸内海地域は御座船型、山陰側は廻船型が基本となっている。住吉神社の「お舟曳き」（鳥取県大山町）では千石船の模型を3艘の台車に載せて曳く。牛窓神社（岡山県）の船だんじりは竜頭付きで、朝鮮通信使の渡海船の影響が感じられる。吉和太鼓祭り（広島県尾道市）では、観音像を載せた船神輿が浄土寺の石段を上る。

四国地方の船だんじりは、ほとんどすべてが御座船型であり、高知県の一部に鯨船型のものが見られる。海岸地方の漁業地域に多く分布しているが、各城下町の祭礼に曳き出される事例もある。素鷲神社（愛媛県今治市）の「船神輿」は、ご神体を載せるものの外観と曳行形態は船だんじりと変わらない。愛媛県四国中央市の三島祭りでは、お船（八幡丸）を曳いたり担いだりする。

九州地方は船だんじりの数が16と少なく、船だんじりの文化はあまり発達していない地域である。一方、神輿の船渡御、船競漕（ペーロンなど）は多く見られ、直接「海」と関係した形で船の文化が発達している。全体として御座船型、廻船型が多いが、福岡稲荷神社（熊本県苓北町）の船だんじりは「川船」と呼ばれる底の浅い船である。長崎県には文化交流の歴史を反映して国内唯一の「阿蘭陀船」「南蛮船」が見られる。唐津くんち（佐賀県唐津市）の七宝丸・鳳凰丸は、それぞれ船首に竜頭・鳳凰をあしらった豪華絢爛な船である。淀姫神社（佐賀県玄海町）では「宝船」を曳く。八屋祇園（福岡県豊前市）、宇島祇園（福岡県豊前市）、中津祇園（大分県中津市）では都市祭礼の中に船だんじりが取り入れられている。

(3)名称

名称としては、単に「船だんじり」と称す

る地域も少なくないが、全国的に見ると「お船」と呼んでいるところが多い。そのほか数例程度ずつであるが、「御座船」（神奈川県、静岡県、広島県、香川県）、「神船」（和歌山県、兵庫県）、「唐船」（和歌山県、長崎県）、「船鉾」（京都府、山口県）、「鯨船」（三重県、高知県）、「曳船」（山口県、高知県、愛媛県、長崎県）、「船山」（青森県、北海道）、「関船」（和歌山県、徳島県、愛媛県、香川県）、「船神輿」（兵庫県、大阪府、愛媛県）、「彼岸船」（広島県）、「加護船」（高知県）、「宮船」（高知県）、「川船」（長崎県）、「南蛮船」（長崎県）、「阿蘭陀船」（長崎県）などと呼んでいるところもある。

「お船」はごく一般的な呼称であるが、「御座船」「関船」「加護船」は参勤交代の御座船を模したことを示すものであり、「鯨船」は捕鯨用の船、「川船」は河川用の船、「唐船」「南蛮船」「阿蘭陀船」は外国の船にイメージを採ったものである。

(4)歴史

明確に製造年代が伝わる船だんじりは一部であるが、現在見るほとんどすべての船だんじりは近世以降に造られたものと考えられる。記録類での確認に加え、そもそも廻船や御座船（参勤交代の船）自体、江戸時代に展開したものである。確実に中世にさかのぼることができる船だんじりは、京都祇園祭の船鉾、津島天王祭の車楽船・巻藁船ぐらいである。船だんじりの文化は、近世期における全国各地（とくに城下町、港町など）の政治・経済の発達とともに花開いた文化といえることができる。

地域の繁栄のシンボル、あるいは藩主や豪商の権力・勢力を示すシンボルとして豪華華麗な船型の山車が祭りに取り入れられ、それが近隣地域にも伝播する中で、「船だんじりの文化」が次第に展開していったものと考えられる。

このように近世以降各地の祭りに取り入れられた船だんじりは、適宜補修や作り直しを繰り返しつつ、その原形をほぼ忠実に残しながら地域で受け継がれてきた。それに対し、とくに昭和に入ってから新たに祭りに入れられた船だんじりは、一般的に簡素な作りで、「海の祭り」の象徴として取り入れられたケースが多い。船体の構造や装飾、囃子なども伝統的に受け継がれてきたものではないが、その分「創作」の余地を大きく残しているとも言える。

(5)形態

船だんじりの形態は、大きく①御座船型、②廻船型、③鯨船型、④その他に分類できるように思われる。①～③はそれぞれ藩主の海路による参勤交代、廻船による交易、捕鯨の拠点に関連している。

愛知県を中心とした中部地方に広く分布する「巻藁船」、長野県に分布する「お船」

は「船型」と言いながらも独自の形態を取り（御座船・廻船・鯨船のように「現実に存在する船」をリアルにかたどったものではない）、また数も多いことから「その他」の中でも単独で類型化すべきものとする。

そのほか、宝船（北海道、徳島県）、竜・麒麟・獅子などの船首を有する船（岡山県）、川船をかたどった船（長崎県、福岡県、徳島県）、「唐船」（和歌山県、長崎県）、「南蛮船」「阿蘭陀船」（長崎県）のように異国の船を模した船もある。岐阜県八百津町の八百津まつりの船だんじりは、3台を合わせると1台の船になるという特異な形をしている。

(6) 関連する民俗芸能

船だんじりの巡行にともない、「御船歌」が斉唱される事例が少なくない。「御船歌」は、各藩において藩主の参勤交代の船の出入りや船遊びの際に歌われた歌で、それが地域の祭礼に取り入れられたものである。したがって、歴史的には近世に入ってから生まれた文化である。各地の船の祭りに関連して広く分布しているが、その歌唱の難しさもあり、伝承が困難になっている地域も多い。

(7) 船だんじりから船の祭りへ

「船だんじり」とは船型の山車のことを指すが、調査を進める中で、その展開型・隣接型とも言えるべき事例に多く会うことになった。具体的には以下のようなタイプの事例が見られた。

- ① 外見は船だんじりと同型で曳いて動かすタイプながら、ご神体を載せ「船神輿」と呼ばれる事例
- ② 船だんじりと同型でありながら、それを曳かずに担ぐ事例
- ③ 船だんじりよりかなり小型の船型を「船神輿」と称して担ぐ事例
- ④ 船型模型を台車に載せて曳く事例
- ⑤ 川渡御をする船だんじりの事例
- ⑥ 海渡御をする船だんじりの事例
- ⑦ 船型舞台で民俗芸能を演じる事例
- ⑧ 海上渡御（船渡御）や船競漕など祭りに出る船を「御座船」「関船」などと呼ぶ事例
- ⑨ 小型の船型を祭り（儀礼）の中心的象徴として使用する事例
- ⑩ 盆の祖霊送り、疫病送りなどの際に形代として船を海や川に流したりする事例

これらは狭い意味での「船だんじり」の枠には収まらない事例ではあるが、外観的には船だんじりとほぼ変わらないものも多い。これらは、地域社会が何らかの形で「船」という象徴を祭りに取り入れる際のヴァリエーションを示している。そうした取り入れ方の一つに、「船だんじり」（山車）という形があると考えてもよいのではないか。今後はさらに視野を広げ、「祭りで見られる『船』」という観点から地域の祭礼を検討することが大きな課題となる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 高橋晋一、川舟型だんじりと河川文化－徳島県三好市池田町・和霊神社の事例より、四国民俗、査読無、No.48、2017、1-12

② 高橋晋一、「船だんじり」と「関船」－徳島県の船型だんじりに見る地域性、四国民俗、査読無、No.47、2016、1-8

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 晋一 (TAKAHASHI, Shinichi)
徳島大学・大学院社会産業理工学研究部
(社会総合科学域)・教授
研究者番号： 10236284